

令和6年度 “信州の木”建築賞 審査委員会講評

木造化、木質化のお手本となる建築物を選定する“信州の木”建築賞は、平成28年度に創設して以来、今年で9回目となり、長野県内で木造建築に携わる者にとって栄誉あるものとして定着してきた。

本年度は、「県産木材を活用したリフォーム又はリノベーション工事を実施した非住宅用途の建築物」をテーマとし、応募された作品は7件であった。どの作品もそれぞれの特徴があり、非常にレベルの高いものばかりであった。

今回の主な評価の視点としては、

- ・地域の文化や風土、まちなみや景観と調和がとれているもの。
- ・県産木材を積極的に活用するとともに、構造材や仕上材に限らず、建具や家具などにも取り入れ、木の特徴や良さを活かした空間づくりの工夫がなされているもの。
- ・木材調達への工夫や木材利用の仕掛けなど、林業、木材産業の振興に寄与しているもの。
- ・木造建築等の技術の継承や耐震・防耐火性能向上など創意工夫を凝らしているもの。
- ・環境負荷の低減に関する配慮など、独自の取組や提案がなされているもの。

以上の5点である。

一次審査では、まず、応募資料をもとに1作品ずつ審査委員が講評し、意見を交換した。審査委員は意匠、構造、環境設備、材料など様々な職種、専門分野から構成されている。そこで、それぞれの専門分野の視点から作品を評価し、その情報を審査委員全員で共有した。どれも二次審査へ進んでも申し分ない作品であったが、これらの意見交換の後に投票を実施し、投票結果をもとに4作品が二次審査の対象となった。

二次審査は、現地審査を行った。実際に作品を見ながら、応募者へのヒアリングを行い、その後、一次審査と同様に審査委員で意見交換した。二次審査へ進んだ4作品はそれぞれに特徴があり、建築性能の向上などの工夫がされていることから4作品すべてが優秀賞以上に相応しいものとし、最優秀賞を選考する投票を行った。投票結果をもとに最優秀賞を1点、優秀賞3点を選定した。

最優秀賞は「木曾路 野尻宿 珈琲刀」、

優秀賞の一つ目は「設計処 柳屋」に、二つ目は「漆の里やきさわらのいえ」に、三つ目を「120年の土蔵の再生 石井味噌 三年蔵大改修工事」に決定した。

最優秀作品である「木曾路 野尻宿 珈琲刀」は、旧中山道の野尻宿において古民家を店舗併用住宅として活用しているもので、宿場長屋の景観に配慮した造りにこだわり、この土地の街並みと建物を気に入って移住してきた施主にとって素晴らしいものとなっている。

また、地場の工務店が施主の要望に応えた空間を実現し、木曾松の店舗のカウンター等への使用や製材時の端材を下地での活用など、県産材利用に努めるとともに、構造や断熱などへの配慮もなされていた。

一つ目の優秀賞である「設計処 柳屋」は、築 100 年の古民家を事務所併用住宅として活用しているもので、道路からの外観は昔の農家住宅として風情を残しつつ、居住エリアのみを断熱改修することで、これから古民家暮らしを考える人が参考になるものであった。

また、敷地内の屋敷林を仕上げ材などに活用する取組みや、これから更なる改修を進めていくということで、今後の成長が期待できるものであった。

二つ目の優秀賞である「漆の里やきさわらのいえ」は、重要伝統的建造物群保存地区内において、既存の民家に使われていた職人の技術を最大限生かしながら、雁行した街並みと調和するデザインとなっていた。

また、耐震補強をはじめ、断熱や再生可能エネルギーの設備の導入などにより省エネ性能を向上させており、他の伝建地区など古い街並みを保存していく上で、参考にできるものであった。

三つ目の優秀賞である「120 年の土蔵の再生 石井味噌 三年蔵大改修工事」は、伝統ある味噌蔵において、老朽化した土蔵を味噌蔵として再生するとともに、新たに食事処の機能を付加し、生まれ変わった味噌蔵兼店舗である。

120 年という時代の経過により建物が傾き、倒壊の危険性さえあった建物が、これから何十年も生き続けられるということで、技術者・技能者にとって参考にできるものであった。

当建築賞は、「お手本」となる優れた建築物を表彰することで、技術者・技能者のスキルアップを図るとともに、広く県民の皆様はその魅力を発信すること目的としている。今回の対象は、県産木材を活用してリフォーム又はリノベーションを実施した非住宅用途の建築物で、古民家や蔵などを耐震性や省エネ性能も付与するよう改修することで、まさしく技術者・技能者のお手本となるような作品が選ばれる結果となった。

先進的な建築事例は、空家対策や県産木材利用の普及、更には既存住宅等の省エネ化による 2050 ゼロカーボンの実現を図っていく上で、広く周知が望まれるものであり、当建築賞の趣旨にも合致するものである。

建築物の使い手と、木材関係者や施工関係者などのつくり手などにより、地域内での景観を生かしながら優れた性能を持つ建築空間を創出するため、当建築賞を通じ、継続した普及啓発を期待したい。

結びに、日常業務でお忙しい中、応募資料の作成や現地でご説明いただいた応募関係者の皆様に感謝を申し上げます。

令和 6 年 11 月 21 日

令和 6 年度“信州の木“建築賞

審査委員長

京都大学生存圏研究所 教授 五十田 博